

## 『明治二十七八年戦役日記』

Research Materials

## 一ノ瀬俊也

## 一 資料の筆者・背景などについて

本稿で紹介する『明治二十七八年戦役日記』<sup>①</sup>の筆者は、本文中の記述によると第二軍第一師団の食糧輸送部隊・糧食第二縦列に所属して日清戦争中の一八九四年一〇月二六日、遼東半島に上陸、一貫して後方輸送に従事、占領後の旅順・大連を見聞するなどした後、終戦とともに無事帰国している。日記の末尾に「丸木力蔵」との署名がある。確実ではないが、以後この名を日記の筆者と見て論を進めることにする。

軍隊内での丸木の階級・身分は記されていないが、日記本文中に「身なりは単への半天同股引」(一八九四年一月二七日)、「五十銭の日給取で一円で人を頼む」(一八九五年一月一日)などの記述があることから、そうした労働条件を規定されていた軍夫と判断される。<sup>②</sup>大谷正氏は彼ら軍夫を日清戦時における日本軍の後方支援体制の欠陥・前近代的性格の象徴と位置づけている。軍夫は正規の戦闘員としての資格が疑わしいにも関わらず、多数が従軍していた(第一師団の例でいえば、総数二四八九〇名中、八〇二四名が軍夫)。実際の戦闘には従事せず、後方で厳しい

労働に従事しながら戦地の状況を見聞していた彼らの体験をその日記から追うことは、ともすれば上からの視点に終始しがちな戦争の実相を、別の角度から描き出すことに他ならない。

丸木の身元に関しては、現状では自宅が東京市「芝区桜田備前町」(一八九五年六月三〇日)にあったこと以外は不明である。ただ日記を見ると漢字の知識は豊富で文章・挿絵ともに書き慣れたものである。とかく「無頼の徒」視されることの多い軍夫であるが、乾氏前掲論文が取りあげているように、自由党壮士が軍夫となつて戦地に赴いた例もあり、<sup>③</sup>多様な階層・教養程度の人員によつて構成されていたことは留意されるべきであろう。

日記は、ほぼ改行なく日々の出来事が綴られ、その間に一・二頁を費やした挿絵が挿入されるという体裁をとっている。ルビが振られていることや、現地の風景に関して、「其のうつくしい事今此本を読人に見せたいくらいでした」(一八九五年一月一七日)などの記述があることなどから、文章・挿絵ともに戦地での下書きを帰国後清書、一冊の「本」として周囲の者に読ませるべく作成されたものと思われる。

日清戦争中、丸木のものと同様に戦地で書かれた「従軍日記」は多数

現存するが、彼の日記の特徴としては、第一に一部の従軍日記のように公刊市販されたものでなく、従って旅順その他における無抵抗の敵兵殺害の状況、徴発（＝略奪）の様子を生々しく描いていることが挙げられる。大谷氏は今後の軍夫研究の課題として「戦地の住民に対しては、しばしば加害者として登場した」軍夫の実態解明が必要であるとしているが、丸木の日記はその有効な資料たりうる。

第二に、多数の挿絵により、あくまで丸木の視点に即したものであって他の写真・文献資料との比較が必要ではあるにせよ、現地の実情をリアルに把握できることが挙げられる。そのため本稿では挿絵も全点掲載した。

本稿執筆にあたっては、東京都公文書館にて東京府『明治二十七八年戦役二関スル東京府兵事務始末』およびその元となった簿冊群の調査を、また防衛庁防衛研究所図書館では日清戦争戦史資料の調査を行ったが、残念ながら丸木の名を見いだすことはできなかった。本来であれば新聞などの史料も検索すべきであるが、時間の都合で果たせなかった。今後の課題としたい。ただ、防衛庁には彼が所属していた第一師団第二糧食縦列の陣中日誌（『明治二十七八年戦役 第一師団陣中日誌 巻七』（千代田資料二七）中に他の連隊・縦列のそれとともに収録、以後「陣中日誌」と略称）が所蔵されており、これと日記の内容を比較検証することにした。次節にて逐次述べるとおり、移動や特異な出来事などの日時・内容はほぼ一致する。

それでは、丸木の体験を日記の記述に即して概観、その特質を検討するとともに、最後になぜ彼の日記が書かれたのかについての展望も示すことにしたい。

## 二 日記にみる戦地の実相

丸木が所属していた第一師団第二糧食縦列の編成であるが、前掲『明

治二十七八年戦役 第一師団陣中日誌 巻七』には第三糧食縦列のみ、その編成表が収録されており（第二糧食縦列はなし）、ほぼ同内容の人員構成と考えられるので参考として掲げる。人員は士官四名（ただしうち一名は曹長）、下士二〇名、兵卒二五名、馬卒五名、人夫五二二名、馬四（乗馬）一八頭。縦列は本部、第一・第二半縦列に、各半縦列は四つの小隊に、さらに各小隊は三または二つの分隊にそれぞれ分割される。一個分隊あたり二八〜二二名の軍夫が割り当てられている。

第二糧食縦列は一八九四年一〇月一八日、小樽丸に乗船して宇品出港、二二日大同江着船、二六日遼東半島中部の東岸・花園河口に上陸した。日時場所船名すべて「陣中日誌」の記述と一致する。ただ丸木日記と「陣中日誌」とでは、一部の宿营地名などに相違がみられ、彼の誤記・記憶違いかと思われるが、一方で丸木の所属していた小隊なり分隊が、本隊と離れて別の場所に宿営していた可能性もある。丸木は上陸早々の二八日、「我が家をやられ泣きさけ」ふ中国人の有様に、「此の難義（儀）をしらぬ政府は気の毒な物なり」との感慨を記している。

第二軍は一〇月六日、旅順防衛上の要地金州を占領したが、翌七日同地に入った丸木は「清兵の死体あちらこちらに倒れあり、首ばかりのもあり」、「五十前後の支那人二丈位な男を前に置き倒れあり、其の子もどこを打たれるあをむきに成りチンコを出して居る様実なさげなく思ひ、涙を目にとめたり、二十才程の娘がどふしたわけかまへもしだらなく死に居るもあり」（十一月七日、【挿絵15】）と、無抵抗の清兵や民間人が多数殺傷された様子を目撃し、絵にも描いている。「敗軍国の人民はあはれな物成り」というのが彼の感想であった。

ついで部隊は南下、旅順・大連へと転戦した。旅順要塞が陥落したのは一〇月二二日のことである。その前後二一〜二四日にわたって旅順市街地で繰り広げられた清兵・民間人の虐殺は「旅順虐殺事件」として著名であるが、市街地以外でも無抵抗の捕虜の殺害は行われていた。例え

ば一月二日、旅順近郊榮城子にて「悪口なす」捕虜に「皆是れをにくんで近き所より水をくみ来たり、あたまりあびせる、見る々間に体は紫色に變じ氷死にしたり」との記述がある。

翌二日、丸木は「清の敗兵成るか身なりの様子では分からねど、捕縛され山景或ハ畑中なぞにて首打たる者数知れず」などと、旅順市街地及びその近辺での破壊殺戮の様相を丹念に記録している。彼自身徵発（略奪）に出かけた先の農家に隠れていた負傷清兵が逃げようとするところを「多勢かけきたりメチャクに切り倒」したり、あるいは翌三日連行した清兵を「直様中へ引入れ首はねたり」など、無抵抗の敵兵殺害に直接立ち会っている。

軍夫自身も虐殺に関与していたことを明確に示すのが、二七日旅順近郊双台溝での、百人長（軍夫中より選抜された差配役）による捕虜試し切りの記述である。「百人長のがんしよく青さめ惣身ふるへ」た様子を見た丸木の感想は、「こをいふ人が神経（症脱か）を起す元ならん」というものだった。相手が現に戦っている敵兵士ということはあるだろうにせよ、先の金州での「涙を目にためたり」という人間的な所感に比べれば、どこか人間の死に対する感覚が麻痺していたように思われる。

もともと、軍夫自身も劣悪な環境下におかれ、生命の危機にさらされていた。大陸の厳冬下、「人夫こへ死ぬ者二十名程あり」（一月二二日、【挿絵20】）ということがあった。「陣中日誌」には同日、「寒氣二劇シク人夫ノ凍死スル者五名其他途中ノ残留者十五名アリテ行進頗ル困難ヲ極メタリ」とある。軍夫ばかりが凍死しているのは、兵士と異なり十分な防寒装備が与えられなかったため、彼らは「あまりさむさの強きゆへ、悪るいと知りつ、チャン公のきもの徵発して、是れきてさむさを凌」いだ。【挿絵24】で百人長・人夫が着ているのがそれであろう。当初は「寒さを凌ぐ為めチャンの明家二行き、衣類を持来り着て居るのを見らレ罰を食ふ」（一月二八日）者があったが、死者が出る有様に上官

も黙認せざるをえなかったのであろうか。一月二日に至つてようやく冬服が支給された。「陣中日誌」にも同日「防寒用品ノ分配ヲナシ」とある。

丸木たちの部隊は旅順をでて北上し、再び金州を通過してさらに北方の普蘭店へ向かい、ここで第二小隊から第三小隊に転属、一八九五年の正月を迎えている。この日丸木は錢を払って仲間を使うことに「五十錢の日給取て一円で人をたのむ、随分戦地は面白ひもの」との感想を記している。「此頃はメキシコ銀貨で百五十円ぐらい持て居た」というが、なぜそのような大金を、しかも「メキシコ銀貨」で持っていたのか不明である。略奪品の可能性もある。

丸木たちはさらに遼東半島を北上し、蓋平城（二月一日占領）、遼東半島付け根近くの営口（三月七日占領）の戦いに伴う物資の運搬のため、各所をあわただしく往復した。丸木はこの間一月二二日「恩田上等兵といふ人」が清人に通行券を与えた廉で処罰された旨を記しているが、二八日の「陣中日誌」には「重禁固一年六月 上等兵恩田李三郎」（罪名の記載なし）とある。この人物が丸木の記録した人物と思われる。

四月四日、講和条約締結を迎えた。もともとこれに関する日記の記述はない。四月一日、兵士・軍夫たちは従軍僧の講話を聞かされている【挿絵51】。天皇の徳をたたえる僧の話に、「いやにわれづぼくやらかしたので、下士官はじめ兵卒人夫一同此演説にかんじてすゝり泣しないう者はない、此時どんな強情な者でもベソぐらいかゝない者はなかつた」と述べている。兵卒・軍夫レベルの天皇観、従軍僧の戦地での役割を考える上で、興味深い記述である。翌一日、丸木は歩兵第二連隊第一大隊第二中隊付となっている。「陣中日誌」にも同日、軍曹一名、兵卒三名、人夫二三名、徒歩車七七両を歩兵第二連隊に分属させた旨の記述がある。二八日「本隊と合う」とあるが、同日の「陣中日誌」にも去る一日に「分遣シタル人員車輛トモ本日帰隊ス」とある。

丸木たちはその後の五月一八日以降、再び金州へ戻った。このころになると、日記前半の凄惨な記述とはうって代わって中国民衆生活の観察・描写が主な記事となる。無聊をまぎらわす意味もあつたのだろうが、丸木は特に感想を述べることなく、民衆生活の諸相を丁寧な挿絵として描写し〔挿絵38、50、52、53〕など、道具・食物類にはいちいち中国語の読みを付したりしている。その丁寧な筆遣いは、皮相な思いこみかもしれないが、丸木の同じ〈生活者〉としてのなにかの親近感、共感のあらわれとはいえないだろうか。もちろん、彼が日記の最後にいたるまで中国人を「チャン公」と呼び、侮蔑感を隠していないことには留意されるべきであるが。

丸木は六月一〇日大連湾を出港（日記には「中越丸」とあるが、「陣中日誌」には「越中丸」とある）、二〇日門司に着船した。二一日広島県似島で解雇の手続きののち、検疫官に引き渡され（同日付「陣中日誌」）二八日広島を出発、三〇日無事自宅に到着している。

### 三 なぜ丸木日記は書かれたのか

丸木の日記が人に読ませるために書かれたのは、ルビがふられていること、先に述べたとおり「読人に見せたい」という記述があることなどから明白である。ではなぜ丸木はこの日記を人に読ませるため書いた（描いた）のか。それは第一には自らの特異な体験を皆に知らせたいという衝動ゆえのことだったのだろうが、それ以外の理由を知る手がかりとなるように思うのが、日記末尾の「日清戦役日本軍死亡者は、有栖川宮殿下及北白川宮殿下始め、其の数実に一万五百四十七人の多きに達し、若し是に軍夫を加ふれば其数又数千にまさん」との記述である。あくまで推測に過ぎないが、門司で盛大な歓迎を受けた際の「自分がひとりにくさをしておいてきて皆んなにはめられたよふな気がして嬉しくって

たまらなかつた」と述べていることと併せ考えれば、自身が国運を賭した大戦争、歴史の画期に立ち会い、かつその勝利に貢献し得たことを誇る気持ちの現れではなかつただろうか。

このことに筆者がこだわるのは、大谷正氏の「軍人と軍夫の戦場体験が日本の対外観、ナショナリズムにどのような影響をあたえていったのか」という問題提起を念頭に置いているからである。この問題解明のためには、まずは彼ら軍夫が帰郷後何をどのように語ったか、その内容を必要があると思われるが、「人に読ませるために書かれた」丸木の日記はその一助たりうると考える。そこで「随分戦地は面白ひ」という所感や、戦争の勝利に貢献し得たことを誇る気持ちが語られる一方、戦地の過酷な労働の有様や凄惨な捕虜殺害の状況、中国民衆生活へのなにかの親近感・共感めいたものなど、戦地体験が多面的に語られていることは、注目すべきことであろう。丸木の以後の生涯を追求して他の兵士、軍夫の事例と比較検討し、彼らの語りの中から、何がいかなる経緯を経て「日本の対外観」に影響をあたえ、何が忘れ去られていったのか解明していくことを、今後の課題としたい。

従軍日記を素材とした従軍者たちの意識・行動の研究は近年ようやく緒についたばかりであり、今後さらなる資料の発掘と研究の進展が待たれるが、本稿がその一助となれば幸いである。

### 註

- (1) 二〇〇一年一月、一ノ瀬が古書店より入手。和綴。全一六四頁、挿絵六七点。
- (2) 日清戦争時の軍夫に関するこれまでの研究としては、乾照夫「軍夫となつた自党壮士」（『地方史研究』一七七、一九八二年六月）、北原糸子「都市東京と軍夫」（大谷正・原田敬一編『日清戦争の社会史』フォーラムA、一九九四年、所収）、大谷正「日清戦争時の「軍夫」関係資料調査旅行の記録（上）（下）」（『専修大学人文科学研究所月報』一四七・一四八、一九九二年五・六月、同「文明戦争」とその矛盾」（石村修ほか編『いま戦争と平和を考える』国際書院、一九九三年、

- 所収)、同「文明戦争」と軍夫(前掲『日清戦争の社会史』所収)がある。うち軍夫の雇用条件に関しては北原氏論文一七〇〜一七三頁を参照。
- (3) 乾氏前掲論文は東京府、神奈川県下などの自由党壮士によって結成され、澎湖島占領作戦に参加した軍夫集団「玉組」の動向を検証している。なお、「玉組」参加者名簿(『日野市史料集・近代二』所収)を検索してみたが、丸木の名は見いだせなかった。
- (4) 新井勝紘「従軍日記に見る兵士像と戦争の記憶」(国立歴史民俗博物館編『人類にとって戦いと民衆』東洋書林、二〇〇〇年)に、その一覧が掲げられている。なお軍夫の日記は、活字化されたものとして鈴木今治(第二師団所屬)『日清戦争従軍日記』『征台従軍日記』(いずれも『山形市史編集資料』二七、一九七二年に所収)、植松小三郎(第四師団所屬?)『征清軍随日記』(岡部牧夫氏が「創文」一〇六〇九号に全文翻刻)があるが、いずれも丸木とは所屬師団が異なり、服務・見聞した地域も異なる。鈴木『日清戦争従軍日記』は一八九五年一月二二日、山東省に上陸してから同年七月まで、日々の労働内容を簡条書きしたもので、戦地の様相・所感を示す記事はあまりない。また植松は、講和条約の締結後になって遼東半島占領を担当した部隊に所屬していたもので、戦場としての現地の様相を記録したものでない。その他未活字化のものに角田平太郎『日清戦争従軍日記』(福島県立図書館蔵)があり、一ノ瀬は未見だが、角田は鈴木と同じ第二師団所屬の軍夫である。
- (5) 前掲「文明戦争」と軍夫」二三四頁。
- (6) 北原氏前掲「都市東京と軍夫」一五九・一六〇頁に、その一覧がある。
- (7) 例えば丸木日記では一〇月二九日花園港を出発後、その夜「サカン河」で路営したとあるが、「陣中日誌」では同日「蕭家堡子二着シ露営」とある。
- (8) 旅順虐殺事件に関する専論としては、大谷正「旅順虐殺事件の一考察」(『専修法学論集』四五、一九八七年)、井上晴樹「旅順虐殺事件」(筑摩書房、一九九五)があるが、同書でもこの戦闘に参加した兵士の日記に多大の関心を払っている。
- (9) 大谷氏前掲「文明戦争」と軍夫」二三四頁。
- (10) 新井氏前掲論文のほか、最近松崎稔「兵士の日清戦争体験―東京府多摩地域を事例に―」、加藤聖文「ある「国民」兵士の誕生―陸軍看護手近藤近太郎の従軍日記が語るもの―」(いずれも松山幸夫編『近代日本の形成と日清戦争―戦争の社会史』雄山閣出版、二〇〇一年、所収)といった個別の地域・人物に向きあった研究が行われつつある。

【凡例】

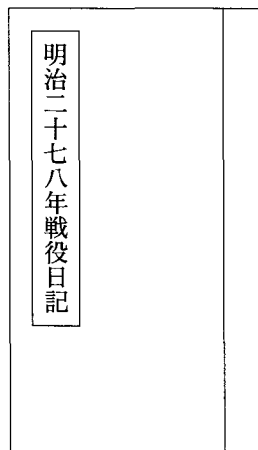
一、文中の旧字体は新字体に改め、検索の便をはかるため月日のみ太字で表示した。ルビはすべて原文のまま。

二、誤字脱字などは可能な限り「」内に補い、地名など固有名詞に関しては、「陣中日誌」を参照した。□は判読不能の文字。

三、読点は、すべて一ノ瀬が挿入した。

四、文中に【挿絵：】とあるのは、基本的にそこで頁がかわって挿絵の頁となっていることを示す。

(表表紙)



(縦二四五mm・横一六九mm)

【本文】

第一師団第二糧食縦列第二小隊付にて、明治二十七年九月廿八日午前四時青山練兵場制列、同八時出発、新橋より汽車広島え向け出発、途中神戸にて下車、南公社前にて休止又々神戸発車、兵庫備前備後すぎ同月三十日広島二着、天満町四百十八番地白米商並ニ湯や吉田寅蔵方へ止宿、東京より広島まで三百一里の由、十月十一日運動のため市中遠足、同月十八日午前十時天満町出発字品港へ行く、波止場より沖を見はたせば軍艦始め運送船は多数、皆黒煙を上げて勇ましく、小蒸気船は其間ひだを走り廻り、はしけ船八本船へあまた通ひ居り、我ら一同小樽丸に乗り込午後三十分字品出般、十九日午前四時三十分頃豊前門司港に着、同九

時三十分同港出港、朝鮮海を通り児島(小)ハ諸々に見ゆ、二十日船中正〔午脱〕十二時頃より四方陸地見ず、船夫ハないしよで酒味かんラムネするめ水菓子売に来る、値ハ三わり四わり高し、我レハ此小樽丸乗込みコックにて元心(安カ)寒き人居合、洋食くず折々もらいきたれば我レかち分捕られ候、尤其の筈【挿絵1・2】昼食が牛に牛房(ウ)と云へばおつなれど、牛は二ツか三ツ夜ハ干じやこ位ひ、夫も少々、中にハそろく鉢巻をした所も勢ひよけれど、かなだらけ借りて小間物見世の仕度、寝たがり起きられぬ人もあり、馬にさへはなをたらし食に付かぬもあり、日々用もなく食事を待つのみ、花がるたしてお目玉頂戴するも有り、香水は日に二度水槽へ番人が付きおそく行けばもらへず、飯を焚二わ米をハかねの箱二入れてむし焚にする、飯はゴソくしてをまけに石炭くさい、二十一日のひる前付族(属)海軍水兵信号旗を振損じ、夫か為に大隊長始め医官各士官の前にて司令官よりきびしく責問はれ、言ハかへせず其のまゝ我が室に立帰り、直ぐさま六連発銃にて自殺をなす、交代時間来り室をあけ見て【挿絵3〜6】驚き、隊長に通じ検視を受、二十二日大同江へ着船、水兵の死体は早々陸へ上げ埋葬す、跡にて咄しを聞ば隊長の号令に鹿相も有りといふ、何は共あれ彼の水兵わ気の毒にて有り、夜は各軍艦二十二隻三十隻の運送船を内に囲み夜を明す、廿三日廿四日同江、二十五日午後一時軍艦二隻運送船三十二隻にて大同江出般(帆)、二十六日午前五時清国花園河港〔花園河口〕に着、爰に舵泊船軍艦西京丸始め八隻運送船三十二隻、午後二時花園港に上陸、多人数の事故其の混雑一方ならず、取落し物あれど取かへす事ならず、夜に入ッて一層混雑を極めたり、暗夜の事故荷物を海へ落すも有り、中に乗馬を巻上げる折あやまつて海中へ落し、是を助けんとて中二人馬もろ共死す、夫にはしけ舟少くなく、二十七日二十八日も三日間に揚げきれず、当所より金州まで支那里程九十里の由、此土地の作物は大豆唐もろこしが多く人家は所々にあるのみ、井戸の少くなきへいこふ、一村七八間もあり又四五間の所も有

り、此村にて井戸一個の所をくあり、海岸より上(上)がればどこも防頭〔坊主〕やま、弾薬の置き場で木のけがすくないといふしやれで、豚はあちらこちらに走り廻る、竹くいを打ち手はへ繩を張りあるは唐もろこしの穀にて区別を付、隊順をきめ是から焚物(焚物)徴発と出かけ、焚物は申までも無くぶた鳥など取来り、ブリキ明〔空〕鑪(カ)にて煮ルもあり焼もあり、焚出しは四斗釜にて縦列だけ焚二も、十個ぐらひ入る事ゆへ其の水に困難なり、野陣の所より五丁程もはなれし山間にて清水の留池あり、爰に四五間の農家有り、是幸ひに此所より諸隊へ分配す、諸隊の兵士は順々先頭より繰りいだし、縦列軍夫ハ其あいだ食ちや寝只荷物の番をするのみ、其外ないしよで一六勝負、爰、一面野山に人間のかたまりあちらにもこちらにも焚火をなし、一様な体りにてあれば少し他所へい出れば、我が隊へ帰る事見覚へ無くれば知難し、夫故各々用意有る者は布或は手拭などへ我が隊号を印しにしてさほの先につけ立置(立)くも有り、紙のぼり満中笠の印も有り、我は又広島出般の前日入用物買あるき小刀ナイフ鉛筆手帳其外扇子ゲドウの面、此ゲドウが大いに役に立ち、最初は舟の中に馬鹿おどりにもちい、花園港へ上がりて此隊の目じるしにつかう、一等わかりよき目印なり、花園港は風景のよき所にて海岸に磯諸々にいで給に有る如くなり、爰々より十丁程はなれ漁師町あり、女子供は立のき皆男ばかり、中にかはいさふなのハ六十ぐらいな爺々病氣にて伏し居り、兵士が行く度ごとにそばにいる婆アさん手を合せ頭をさげ、涙をこぼし泣きながら日本人好々といふ、命ばかりハ助けてくれといはぬばかり、其の有様のあはれさ中二は我が家をやられ泣きさげび、日本人を見るごと悪口の如き言を吐き氣違の如く、夫も其のはつ金持はよけれど貧ぼう人ハ親族ハなし立のく所はなし、家は焼かれ畑は荒らされ立ツ目なし、氣違に成も尤なり、此の難義をしらぬ政府は氣の毒な物なり、【挿絵7】左に図したるハ大豆を取上げ積み揚げ所、此大豆をかこうニハ四間四方ぐらいに地へくいを打ち、【挿絵8】アンペラ(カ)を巻きさい豆を一ツ

ばいに入れ、其の上を又巻いて一ッぱいつめる段々に高く成る、しまいに二三丈余二也、一番上に家根をこしらへかこい置く、此一ツのかこの石数を聞き【挿絵9・10】もらしたるが何しろ此金高はよほどの物ならん、炊事掛りもながくほねのをれる、夜の九時十時に成つても夕食の廻らぬ隊も有、十月月末に一枚の半天股引、寒国の事故さむさも激しく日本の十二月頃なり、此寒さを凌ぐ為めチャンの明家二行き、衣類を持来り着て居るのを見らレ罰を食ふ有、十月二十九日午後一時花園港出発、此日風烈しくさむさ強く、日本里程三里ほど行きサカン河に着、焚火してもろこしからをきて夜を明す、三十日午前六時サカン河出発、午後七時頃地名王家店を通り、獵子窩浮子家にて路営、三十一日浮子家より王家店迄帰る、路営、十一月一日又々浮子家二行く、此地はなか／＼田舎に八家の多き所也、海岸にて漁師の内二宿る、此夜上陸の兵並軍夫あまた上陸す、二日同所、自宅より手紙届く、浮子家にて三日天長節、御酒賜る、大隊本部へ行き食物ごしらひにていそがしく、四日はより人家なき山間二入り、五日八前日より夜通し山中を走る、夫故食事ごしらへ出来ず、道明寺を流し水にしたし食いながら行く、地名伊加外に路営、六日地名三十里台子にて舍営、此日金州城落城二付夜の二時出発、七日我ら金州北門より入る、分捕の品は大砲小銃弾薬色々なる旗多く有り、城内は家々つらなり外村ハ通線に三町程家がならぶのみ、裏ハ皆畑けばかり城の囲八丈余二てあつみは六尺余もあり、此壁上を大砲引きあるく、城門は第一の戸びら鉄板を打けんごなり、内ハ日本の見付の外方の如くで円型をなし又第二の門あり、是を入れば両側家ならび商人もあり職人あり、二丁程行と四ツ辻右は西門通り左は東門通り、ますぐにゆけば南門なり、此四ツ辻に中門あり、此中門は日本の寺院の山門の如く赤くぬり、此二階には雷神太子様のよふなのと童子居ならび、はしの方に雷神風の神の如き木像立ちならび、是はどこの門にも有る様子、道路二ハ清兵の死体あちらこちらに倒れあり、首ばかりのもあり疵を受けて半生のもあり、南

門ぎハ殊に道悪しく水はガバ／＼たまり荷車はのべつに通る、其の度にはねる、南門外へいけると石橋、爰に破裂弾に当たりしハ五十前後の支那人二丈位いな男を前に置き倒れ居り、其の子もどこを打たれるあをむきに成りチンコを出して居る様実なきけなく思ひ、涙を目にためたり、二十才程の娘がどふしたわけかまへもしだらなく死に居もあり、実に敗軍国の人民はあはれな物成り【挿絵11・16】宿九日亮甲店出発、劉家店二行く亮甲店二帰る、十日亮甲店出発、劉家店を通り金州城を東門より南門へぬけ午後六時大連灣に着、十一日大連灣出発、亮甲店に帰る、十二日亮甲店出発、劉家店をすぎ金州城でまい農家に宿、此夜微発の鳥をしこたま煮てばくつく最中、九時頃支那騎兵隊劉家店兵站司令部に押し来る、我が縦列急ぎ金州へ行く、其の内我兵士来て追打つ、此日自宅より手紙届く、十三日金州城南門外に舍営、十四日大連灣へ行く、鶴見亀吉殿兄にて釜山丸乗込中成る串田徳次殿に面会す、此時何となくなつかくしく思ひたり、爰に弾薬破裂の為に我が兵士多く負傷す、顔は黒焦に目にはれふさがり、手足指などさけはれ、面部醬油樽の様ふにはれた者も有り、皆々野戦病院に送らる、大連灣は砲台のすてきなものは有れど、市中は誠二きたなく家々はちいさく古く、あまり繁昌な所とは思はれず、【挿絵17・18】爰に給がきしは大連灣砲台構内上官詰所前通りに敷つめたるワ小石を持って赤石黒石白又は鼠色など取ませ、上にある図如く通路にしきつめあり、なか／＼めんどふ成る仕事なり、砲台を造るにも植屋がいりそふなり、此敷石の図は残らずかくにはしまがとれる故、品形半分しるし置く、十五日自宅より手紙届く、此日柳樹屯に行き舍営、南三十里堡まで往服路営、十六日柳樹屯より南三十里堡え往服、十七日往服、十八日南関嶺にて路営、十九日前革鎮堡え行き路営、廿日双台溝にて路営、廿一日ハ進みて榮城子二行、爰に清兵の生取り有り、敵の様子を尋れど実を云はず、彼を柳の木にく／＼し付け猶調たるにかへつて悪口なす、【挿絵19】皆是れをにくんで近き所より水をくみ来たり、あたまよりあびせ

る、十一月の末寒風はげしく、跡より追々来る兵士此嘶しを聞我もく、と水を掛る、見る々間に体は紫色に變じ氷死にしたり、此夜は大風雨なれ共寒さ猶つよく、焚火は所々にほじまる、此の火が縦列本部の馬小屋の屋根に付いたさアたまら【挿絵20】ない、たちまち広がったる小屋より物置二つり馬一頭焼死ぬ、此夜は火消しと寝どこのなくて夜をあかす、廿二日水師宮方面に大砲小銃をびたゞしく聞こゆる、先とふハつかへたので土城子に休止、少し間があるから薩摩芋の徵発と出かけた、農家へはいりそこに穴蔵があつた、其の穴蔵につみ上げた【挿絵21・22】芋が沢山あり、四五名にて取に入り始の内ハ薄くらきゆへ氣も付かず居りしが、何やらうなり聞のする故きが付見れば清兵の負傷者成り、皆々驚き穴より飛いだし我が兵士を呼びたつれば、以前の清兵穴の中より飛びだしにげよふとする所へ多勢かけきたりメチャクに切り倒したり、其の間に前への号令にて旅順港へ進み行く、路に打死の者兩辺に打たをれ家は所々に焼跡有り、馬の半やけあり驢馬豚などそこらにさまよひ、兵士は分捕のラクダ馬に荷物付て来るもあり、又ハ清の敗兵成るか身なりの様子では分からねど、捕縛され山景或ハ畑中なぞにて首打たる者数しれず、殊にあわれ二思ひしは婆さん二十九くらいな娘と子供と廿三四の男付添い、荷物を天びんにかつぎ来たるを我が兵士是を捕へ其の男をつれ行く、娘婆さん共泣きさけぶ、哀れなるハ其の男どこへつれゆかれしか定めし殺されたるべし、旅順ニは練兵場射的場並ニ兵營有り、爰にも天幕を帳所々に焚火の跡、山々ニは砲台三十余ヶ所見へ、なかく多人数居た様子成り、夫より進みゆけば兩側ニちいさき古き家間ばらにあり、少し先へ行けば一寸した家も中ニハあり、質商か古着屋成るか、店より奥の間まで上中下のしやべつなく古衣物一面に取散しあり、其のとなりへゆき、内に入て思はず奥の室を見れば支那人二人切られ居り、あわて、飛出し筋向いの油荒物商、此家ニは三十前後の女只一り蒲団を前にかけ寄り掛りいるゆへ、尋ね問へば昨夜此さハぎに出生産し、家

内の物は逃走せしか殺れしや婦宅せず、夫故産婦一人にげをくれし者成り、跡にて聞けば日本の医官きたり手あてをし薬をあたへしとゆふ、此家も種々売品道具など土間へなげちらし、其上をふみつぶし出入りする、何にやら足元のおくくするゆへ持上げて見れば男の死骸、又も此家を飛出し、今度は左り横町へまがり裏通りへでたる所、爰は驚の外なし、支那人の死体二人三人あちらにもこちらにも一番多きかたまりは四十名の余にて、亦々通りへいでゆけば乾物屋の様ふ成る家に十文銭差したばのまゝ積み重ね、あたりは錢をまいた如く、百円札なれば拾う人も多けれど十文銭ではひろつた処で三十銭か四十銭、夫もかさばる故じきに見付られ罰を食ふがせきの山、是より先へゆけば海軍屋敷稅務所あり、館内は立ツばな物、家ののき下腕木などに竜唐獅々花鳥など堀(彫)物五色のいろ取、日本で申さば社の如く、爰より海岸へいれば日本船佐倉丸来り、海辺へ横付にして船よりさんばしを道路に渡し米俵をころがしをとせば人足是れをかつき倉へはこぶ、誠に便利なもの、夫はよけれど敵の置き去つたる南京米、かますのまゝ何十俵とも知れず取ちらし、中にハ袋やぶれ路悪の中へしひたる様ふ成り、夫より海の端を右まわりして旅順街に行けば、爰は三丁程の町にて一寸した商人も有り、前後二は木戸あり、此町の裏通りは西海岸にて海中には小島、爰に砲台見ゆ、岸辺に小船商船あり、前日敗走の折こゝより本船にうつらんとして海中ニ落入る者、はしけ船なくしておよぐ者、あはてまとも中我兵追打して敵をさんぐになやます、其の折の敵の死体水の中にかみ背をいだし、又はしりを出しブクブク浮きあるさまは、遠く見れば海水浴のあり様なり、此日双台溝へ帰る大雨、寒暖計廿五六度(俄)にハかの寒さゆへ、人夫こゝへ死ぬ者二十名程あり、又我が兵士戦乱のさい敵陣に入り困難してようく本隊にかへる、双台溝にても残兵の切らるゝ物(者)多く有り、廿三日此日も敵兵数人つれ来り、松山畑中にて首打たる、此遼東半島ハどこも小石砂利多き土地にて、日々の食料青物ハ我が家のほとりに作



りあり、他人にとられぬ様ふ困ひを此畑よりいでし石にて造る成り、爰へ例ひの清兵三名つれ来り、二人は石がこいの内に入りしが、今一人年かきの者何んといッても聞き入らず、たゞもくねんと立ち居るのみ、あまりの事故うしろより靴にて足をけたれば、前へ二足三足出たると思ふうち、石がこいの角に頭を我れ乍打つけたれど、眼くらみうちたをれたるばかり、直様中へ引入れ首はねたり、廿四日旅順口へ死ぶと方付に行く、前日の支那人の死骸山へ穴を掘り皆々うづめる、此の旅順街の觀戲所日本芝居小屋成り、軍人の催しにて支那人男女の芝居有り、内に入りて見れば狂言の線は元より詞もわからず、まるで日本の神代神楽の如し、同日双台溝二かへる、廿五日当地仮病院二兵士並二人夫有りしが残兵急ニ襲来し、身方手うす故二四十名程うたる、廿六日廿七日同所、残兵を捕へ来り斬殺するにあたり、係りの人より百人長にドウダ斬てみんかといはれ、物は為しだやツて見ると先最初斬形ををしへられ、夫から繩付を引ききたり、ひとり後ろに繩を持つ、チャン公はハアヨ〜と泣き居り、用意よきゆへ刀抜きはなせばチャン公にげかゝる間に首切をとしたり、其の時の百人長のがんしよく青ざめ惣身ふるへ、只ぼふぜんツ立ッたさま血刀さげたるふう何んとなく驚いた様子、氣しよくの悪そふなあんばい、そばに見て居た人が君どふしたといわれて心付く、其の時我思ふに、こをいふ人が神經を起す元ならん、此日亦々旅順口へ行く、路ニチヨロ〜流れの沢あり、此中に牛の革をはぎ肉を取かけあり、是はしめたナイフを出し、しこ玉肉を取ッて居る間ニ皆先へいッてしまひ、跡からあわて、追かけたらやツとの事でき付いたが、隊長二大目玉食らッてあげくのはてハ肉の取上げ随分氣のきかぬ咄し、茂早や寒さも烈しく身なりは単への半天 同股引、あまりさむさの強きゆへ、悪るいと知りつ、チャン公のきもの微発して、是れきてさむさを凌ぐ、思い〜にきたふうぞく余程妙てこなふう成り、【挿絵23〜25】廿八日旅順口出發、此日大雨寒暖計廿八度、足袋はらじわ切れる、をまけに畑中を車を引事

ゆへ動かばこそ、又蒲ぎの者腹のすいたる人など多く路辺に倒れ、中にハ氷死する者あり、是れまで四斗釜にて小隊ごとに焚しが赤金の釜ゆへめしのこげ付キ多く、花園港上陸いらい十月の廿六日より十一月の廿六七日頃にて此釜もそこぬけ、夫が為に此雨中にくるしむ、着衣はびしよぬれ、其のまゝ米とき釜を尋ねあるき、半釜にて二斗焚ぐらゐの釜にて分隊ごとにめしを焚く、夜の事故足元はくらし米をとぐにも井戸ハしれず、いそいで其の井戸へをつるも有り、落るも道利井戸側無きゆへ、此地名左溝屯舎營、廿九日左溝屯出發、旅順金州間にて南三十里堡二舎營、三十日金州城近村にて馬家屯舎營、十二月一日金州城にて糧食を積み、今迄は山又ハ畑けばかりあるき、たま〜人家あれば明家も此頃の金州へは支那人の立ち帰る者ほつ〜あり、久しぶりにてあづきが有るゆへ砂糖を買つて湯であづきでもこしらへてやツつけよと思ひ、砂糖も十錢ぐらゐでは一トなめしきや無いから大まい五十錢ふんばつして買ひに遣つて、夫から支那の洗湯も初めてだから飛こんで見た、中の様子は日本とたいした違いハないがき物ハはいた所にぬぎばなし、あたりのきたないのはあたりまい、女湯ハなし男湯ばかり、湯銭ハ二りんでも三りんでも取り、湯から揚ッて錢を払つた処へくると湯やのチャン公台を前に置き、いすに腰かけきうすからきたない茶碗へ茶をくんで出す、呑みかけて出てゆく、其の呑みかけの茶をまたきうすへあけて次の客に又だす、知らずに又呑、是から湯やを飛だし、追々荷物の有る所えあつまり来る、前に砂糖を買ひにやツた者今か〜と待つ程に一ツ盃機嫌で立ち帰る、どふした有ツたか、イヤ兄すすまねへが錢をどこへか落してしまつた、あいにくおれも持合せがねへから少しの内貸てくんねへ、なけなしの錢をとされてけんかしてもつまずらず、其の内出發の号令、泣つらしながら車引き出しける、夜に入て地名北四十里堡二付く、爰へ支那人とうふを売にきたる、買ッて生豆腐に味噌を付て食ふ、同地舎營、【挿絵26】十二月二日朝冬服と引換、三日四十里堡出發、北三十里堡を通り地名石河駅二休

足、是より先き道路に清兵の死体所々に有り、地名長林房(堡)ニ舎營、  
四日此舎營した家の台所に目張りの仕た瓶有り、此ふたを明ければ中よ  
り塩からのほいがする故取り出し見れば、海老かにしやこな皮の  
まゝ塩づけにして有り、其のうま相ふなにほいゆへ少しづつ、ヤツて見た  
所、中々味じはい、が今いふ皮のあるので仕方がないからかんで露をす  
ツちやアほきだし、しまいにハ口の中ハ火事の様ふにかツかとほて  
ツてきた、其の筈しやこかにの鏡でつツいたので湯茶がしみてイヤハヤ  
よわツた、夫から此近所の家のそとがこいの壁に福といふ字が出てあツ  
た、支那といふ所ハたいそう福といふ字がすきで、どこの内にも紙にか  
いて帳ツて有、【挿絵27】五日長林房出発、地名普蘭店ニ着し舎營、又々  
残兵殺さるゝ、六七八九日同所、十日二小隊より三小隊九分隊に替る、  
十一日より十四日同所、十五日同所より石河駅まで往復、十六日十七日  
同所、十八日石河へ往復、十九日廿日同所、廿一日石河へ往復、夫より第  
一連隊本部へゆく、此日軍旗祭、水島勇吉へ手紙を出す、廿三日石河へ  
行き舎營、廿四日北三十里堡に行きて勝飯を受取、石河駅にもどる、勝  
飯を置きすぐ三十里堡ニ行き、夜にいッて舎營に付、廿五日三十里堡出  
発、石河を通り普蘭店舎營、廿六日同所滞在、廿七日石河へ往復、廿八  
日普蘭店ニて酒並びに紙巻煙草四十本ツゝもらう、廿九日石河へ往復、  
三十日普蘭店滞在、三十一日石河往復、一月一日普蘭店の車輛場に皆あ  
つまり、天皇陛下方歳を三度となり、亦小隊ごとに松飾をなし、考へ物  
の飾り物など出来て賑敷あツた、此頃は寒さいよ、はげしく焚物ハ無  
く、遠くはなれし所へゆき家をこはし来り、宿營の内にて焚火をすれど  
前進の兵士なぞが戸びら打こはし焚物にしたゆへ、入口はあけばなし日  
本の様ふに晝はなし、土間へ唐もろこしの殺を引き火を中に車座になり、  
髭づらもあれば湯へもろくにはいらぬ者は目ばかり光りき物ハあかぢみ  
ほころび、丸で曇帳芝居の山賊の如し、此辺も井戸のすくない所にて水を  
くむにも道具はなし、ブルキの明鐘をひろいきたり、二丁も有る所の河へ

くみにゆく、河中ハ二丁ぐらいの所もあり、半丁四半丁の所もあり、水ハ  
河べりより余程先まで氷つめまん中が少しチヨロ、流て居るばかり、  
此氷の上を風に吹かれて往きかいら四丁もある事故、いそげば水はこぼ  
れて内までくればヤツと二合かそこいら、是をブルキのまゝわかつてサ  
アのもふと思ふと側から一ぱいくれくと我れの呑のハほんの少々、こ  
をいふ時ハ水も貴い、タガ銭さい有ればこんな思いをしなくてもすむ、  
大あくらかいて水をくんでこい鳥を買てこい、ついで二こしらへて煮て  
くれ肩をた、いくれ、一円やるから石河まで米を引にいッてくれ、五十  
銭の日給取で一円で人をたのむ、随分戦地は面白ひもの、此頃はメキシ  
コ銀貨で百五十円ぐらい持て居たゆへ、一円ヤツて三日ぐらい持てもら  
ツた事もあツたが野戦郵便のないため、此金も十日ばかりで皆チャアア  
ウ、二日同所滞在、各事身体検査、三日普蘭店出発、チンカ屯に行き舎  
營、四日復州城てまへ草家店ニ舎營、五日石家子(石家屯)にゆく、六  
日齊家房を通り坂(左家)屯に宿、七日熊岳城近所の農家に夜に入ッて  
着す、此日昼めしを食たぎり夜の三時すぎまで舎營につかず、夫が為食  
事もなさず、達者な人ハかへッて路に倒る者あり、我は又昼の休止の折  
あき家に入り見れば大き成る瓶あり、中に粟のもろみ酒、こいつしめた  
と今ふたりつれ来り、茶筒のよふなづるキの入れ物へうんとつめ込、途  
中ぐで手つかみに口へほをばり露を吸い取ッてハ粟つぶをほきだし酒  
にしてハ少し手数がかゝるけれど、なか／＼ほろよいに成ツてきた時ハ  
いゝ心もちだ、他の者ハ腹がへッて泣つらして居るにこツちは大御機嫌  
まいにハ粟つぶまでかんで食ふ始末さ、夫でをまけに宿につくと、此百  
姓家にあつた肉が湯で、かめにどツさりあツた、サアめしを焚より此方へ  
先きにとりかゝツた、しこ玉ばくついてめしをたいていゝとなツたら朝  
の四時半、八日同所より熊岳城まで往復、九日同所出発、熊岳城通りぬ  
け、蛇(坨)台堡とゆう所に行き舎營、十日蛇台堡より熊岳へ往復、此  
路上下七里、十一日同所、十二日同所、此日蓋(蓋)平城落城、十五

日鶴見亀吉方へ手紙を出す、十六日まで同所、十七日蛇台堡より州方面へ出発、爰にすこしいふ事ある、此蛇台堡から熊岳へゆく路に梅干のいッばい入れある四斗樽一本かゞみがぬけて落てあつた、前々日より雪がふつたゆへ梅ハよごれづどふかしてしろをと思ふが、軍曹がやかましくていつでも愛へくるとかけ足、今度ハ中〔仲〕間と相談して置いて、其の梅干のてまいへ行くくと小便がでたいといッて跡へのこり、梅ぼししるッてかけたした、此梅ぼしは三日めでしろッたが、支那人の往来すれ共此梅ぼしひと樽ひろッていかない処を一寸かいて見たのです、此十七日もつよい雪ふりでありました、【挿絵28】右の石碑ハ町の入り口村のはづれ並木のよふな所に立有り、此近べんの墓は多く土てなり、此日西二台子といふ所へ行く、此町は両側に柳が植てあり、柳に雪がつもり是が氷ッて日に照らされる、其のうつくしい事今此本を読人に見せたいくらいでした、十八日盖平城東門外舍營、十九日盖平城十五丁程ゆけばダラ／＼上りの山道を切割、爰に石門あり山上には砲台あり、石門を出れば又下り坂、間ばらに立ッたる百姓や、是を打越れば一面の原、雪ハ降つゝき先手はつかへて進む事ならず、其内日ハ暮る、寒さにたへかね三丁程もある所を横道へくだり、農家よりもろこし殻を取きたり、焚火してあたるもわづかな間、いよ／＼小隊跡への号令かゝれど寒さはさむし道ハ氷る、往二通ッた道もくらき故に少しもわからず、足袋わらじも氷る、やゝともすればすッてんころりとやらかす、道巾ハせまく方々ハ九、わるくするところげ込む、よを／＼の事で盖平迄帰ッてきた、廿日東門外に舍營、廿二日同所、廿三日輜重兵ニて恩田上等兵といふ人此近方の十七八才ぐらゐの清人に通券をかいてやりしが、是をもつて營口の方面へゆきしに哨兵線ニて取をさへられ、其の組の隊長へつれゆかれ、たゞされたる所前記の通りなれば、恩田上等兵は早速舍營より引立られ、とり調の上軍律によッて懲罰せられたり、此頃より商民立ちかへる、南門外ニも東門外ニも日々市がたつ、其の売物に○鶏卵○鶏○

根深葱○白菜○葫○卜○木瓜○茄子○大椒○包米○高粮○山菓○地瓜○西瓜○黄豆○蒜○長豆○糖○焼酎○□○卜○大醬○茶 此外さげかごにてまんじうなど売あるく、又大家は商業につく者なし、此盖平城は南門東門の二門成り、西門ハあれど戦争前ハ戸びらをしめ石を一面につめ通行なく、此度敗走の折に中より敵打くづし太平山或ハ營口の方へにげゆきたり、爰にをかしきハ東門内左城壁の穴に打死の清兵只ひとりとのこされ、此寒氣ニ死体氷かたまり首と足を上へむけた風俗は船の形ちなり、通りかゝりの者をもしろ半分此足をとらへて力まかせにまはせばこまの如くにまはる、かわりがわりにまはして見る、廿四五日同所滞在、二十六日旧正月元日、牛莊まで十八里大連灣へ六十里程の由、廿七八九日同所、三十日石門の有る所をこへ比煙濟〔飛雲塞？〕往復、爰は先日の夜すべッてころんだ所、三十一日より二月一二三四日營口方面ニて大砲しきりにきこゆる、營口まで十里、五日比煙濟兵站司令部まで往復、六七日滞在、八日比煙濟往復、水島勇吉より手紙届、九日十日水島へ手紙を出す、此日地名四家甸子道ちへ進む、たちまち大雪になり、前々日の雪とニて二尺五寸程もつより、我と外二人ニて大六車へ米三俵と二斗焚平釜と手桶水瓢小鍋、此外雜器並二軍曹の手荷物各々三人の手荷物是を積み、いつもなればかけ足にてゆくのならど、今日はなか／＼かけ足所か並足ニもゆかず、車のはハ半分雪の中いへめり込み梶棒へひとり後へひとり残りのひとりハ横手にまハリ車をつかんで、アゝんとこえんやのドッコイシヨ、是でヤッと五六寸ぐらゐしきア動かない、こを成るとてんでんばら／＼、先の方へゆくもあり、平一面の雪ニてはたけやら往来やらどぶやらすこしもわからない、中ニハ溝の中へ車ごとたをれて荷はくづれる怪我をする、其の内我が車のふたりハあまり車の動かぬゆへ、もッとうしろを押せといふ、梶の引よふが悪いといふ、二言三言いゝあいはてハつかみ合ところへ軍曹馬で飛できた、コラ貴様たちハ何して居るかアといきなりサアベルをしいこぬいてめちやく／＼にと

やされ、夫でけんかをもをしまい、仕方なしに先の村までいって釜のだん  
どりをして、めし焚に取りかゝるふとすると又々軍曹が来て、貴様たち  
早く荷を車へつんで後へもどれといふからどふいふわけですと聞と、ど  
ふいふもへちまもない、敵がくるから早くもどれ、ヤアそれじゃア大変  
サアいそいで荷を車へつんで引もどした、此時はいきよりよッぽと早か  
つた、又々蓋平東門外舎営、十一日二十三十四日滞在、十五日脚氣  
をやみ診察をうける、今も日々雪降る、爰にて雪の形を見る、其の折の  
雪のかたちは〔雪の結晶の図、略〕一ツの雪のさし渡し、大にて二分五  
りん二分一分五りん、あつ身ハ二りんぐらい、右雪氷にて形を造り  
をり、此雪が風車の如くクルクル廻りながらヒラヒラ落るぐはいきれい  
な物なり、是は日々かく降る物にあらず、其の時の気候に寄て綿の様  
なものあれば塩のよふ又はザラメ糖のよふなものあり、十六日十七日同  
所、十八日太石橋まで往復、十九日同所、二十日営口方面に砲声はげし  
く聞こゆる、廿一日廿二日同所、廿三日蓋平東門外出発、近村に舎営、  
廿四日同所出発、太平山占領四家甸子へゆき舎営、廿五日四家甸子より  
太平山まで往復、廿六日廿七廿八日同所滞在、鶴見氏並二とみより手紙  
届く、〔挿絵28〕朱家甸子にて人夫、支那人の内にて悪しき事して罰  
せらるゝ、本部より命令其の家児十才ぐらいの児供に其の縄じりを持た  
せ、支那人の家ごとつれあるき、軍隊へも引まわし是にて罪を差引きし  
たり、〔三月〕二日朱家甸子出発、破台子を通り古家子二着、舎営、三日  
同所、四日白樂堡〔博落甫〕と云ふ所へ、雪焼にて足のくずれた兵士を  
荷車持ッて引にゆく、五日古家子より三家子まで往復、六日古家子出発、  
同日近村二舎営、七日同所出発、此日大雪老爺廟大休止、同地に旅団本  
部たつ、営口は六日に落城、此日前唐家堡〔凹〕子二着、舎営、八日老  
爺廟へもどり米菜を受取、営口へゆき近村二宿、田庄台は大勝り、〔挿  
絵33〕〔35〕此老爺廟より前唐家堡子へ行く路は畑地多く、其の端に色々  
と沢山なかれ木がはへて有る、夫へ雪を積かさね水をたびくかくれば

氷にて堅固成る強壁となる、敵は是に寄て発砲す、一寸手軽な思付な  
り、爰に清兵打死して死体とりのこされたれも是をかたづけける者なく、  
往來に打たれたさまハ左に写す、又野に埋葬の置きりもあり、棺箱は  
紅から染にてあつ板にて造りあり、〔挿絵36〕〔37〕清兵の死体顔と手は犬  
又ハ鳥の為に食ひむしられ、衣類のある所だけ其のまゝにあり、随分うす  
きみの悪きもの也、田庄台戦勝の後は休戦二なる、営口近村にて後唐家  
堡子舎営、九日此遼東半島はいづこも井戸のすくない所にて、此唐家堡  
子も家は間ばらに六七間あれど井戸は一ツも見あたらす、雪の中を諸々  
さがした所三間四方ぐらいのすり鉢なりの穴あり、まん中に一ツの箱が  
いけてあり、此箱へまハリの雪がとけてたまりた〔る脱力〕をすくッて  
呑水二つかうといふ事ゆへくみ来り、めしをたいが多ぜいでくむ事故  
はてハ泥水、夜に入ッて焚しめはくらき故、出来あがッて食ッて見れ  
ば石まじりのじやりく、十日営口より先へ一里程行く、同日もどりで  
近村舎営、十一日前記老爺廟二引上、近村なる支那人荷馬車宿にとまる、  
十二日白樂堡に宿、此日より日々大雪、十三日蓋平に帰り来る、南門よ  
り三里程はなれ龍王廟子といふ所に舎営、十四五日同所、十七日水島  
並二横浜より一月廿八日出の手紙届く、十八日西二台子に來り舎営、  
十九日廿日同所、廿一日此頃雪とけにて諸河満水、廿二日蓋平城南門前  
の橋流るゝ、廿三日廿四日招魂祭、又金州城に小松宮殿下御着、鶴見氏  
へ手紙を出す、廿五日蓋平野戦郵便局より東京鶴見へ為換を出す、廿六  
七日同所、廿八日東京より手紙届、廿九日三十日三十一日同所、四月一  
日為換を鶴見へ出す、二日三日諸々大そうじ、四日御酒被下兵士軍夫打  
まじり大角力あり、五日近村張家屯〔張家大塞?〕へ足ならし二行、六  
日より十日まで西二台子にて休、折々井戸の番人に当らる、是は土人の  
内二毒など入る者ある故なり、さなく共まんじうなぞ売あるく者あり、  
十銭に三十ぐらいで買食ッたる人の中二わ腹のいたんだ者もあり、ある  
いは一人りにてはなれた所へゆき土人に打殺され井戸へなげこまれ久し

く知れずに居た者もあり、夫が為遠足を禁らる、医官よりは水ハ一節呑  
 な、今各々つかれたる処へなま水を呑ば、急遽わづらふ故氣を付るよ  
 ふ、亦門徒法華師種々な宗派の僧きたり説法を兵士人夫まであつめ聞  
 かせ、中にひとりうまいぼうずがあつた、其の演説に日本広島ニてある  
 ひ 天皇陛下御付の方をめし兵卒の服を持てとを、せある故、侍従方ふ  
 しんに思ひさし上げたる所、其の服を御めしに成り早朝より庭に御立ち  
 であられ歩行なさるゝゆへ、御付の方々より御風めされては相成りませぬ  
 ゆへ還御相なりたくと申上れば、苦うないすて置け兵卒等もさだめし寒  
 国ニ居り困難仕すであらふ、よも其の困難をためし居るのぢやとを、せ  
 あれば、を付の方々袖をぬらさぬ人はなく、一天万上の君たる陛下兵士  
 の服装して寒きの御ためしあるとは、なんと皆さんありがたい事ではあ  
 りませんかとぼふづが声を上げたり下げたり、いやにあわれづぼくやら  
 かけたので、下士官はじめ兵卒人夫皆一同此演説にかんじてすゝり泣し  
 ない者はない、此時どんな強情な者でもベソぐらいかゝない者はなか  
 った、十一日朝西二台子より蓋平城南門外近き所に七家塙と云ふ所にゆき、  
 東京鎮台歩兵第二連隊一大隊二中隊付と也、十二日より十六日まで同所  
 ニて休、十七日朝七家塙出発、同日偏坡子着、舎営、十八日ペンバザア  
 発し、蛇台堡中食、此所より蓋平へ五里西二台子へ三里、是より三里  
 半ゆき熊岳城南門外ニて頭台子着、舎営、十九日頭台子出発、先日昼  
 間粟酒を呑皆々腹へりのさい我等湯で豚のある家に当りひとり満腹し  
 た所、すなはち齊家房を通り、夜に入つて路が知なく草原にたゝずむ、  
 要々道あんなをつれ来り、夏家屯に着、雪の中で梅乾をしろつた所は四  
 里程跡蛇台堡と熊岳の間なり、廿日夏家屯出発、此の道ハ山多く、楊家  
 屯を通り馬廠屯二宿、廿一日同所より復州城まで一里十二丁、廿二日同  
 所出発、復州城南門外東瓦房屯舎営、廿三日同所、兵士の舎営を見て婦  
 女児供又々立退、梅桃の花満開、近村畑地ハ葱ガ多し、廿四日廿五日  
 頃より燕鳥来る、廿六日とみより手紙届、廿七日同所、廿八日歩兵中隊

に分れ瓦房屯出発、范家屯中食、牛圈子と云ふ所へゆき本隊と合う、廿  
 九日同所滞在、柳樹の若葉めだし五六分、とみより三月三十日の手紙此  
 日届、陽輝亭へ手紙を出す、三十日五月一二三(日)同所、四日大買家  
 屯へ糧秣受取にゆく、五日真宗法師の演説あり、又李の花盛り、六日隊  
 中の仏事供事をあり、七日南家屯二行き、牛家屯へまはり牛圈子に帰る、  
 八日四月廿二日鶴見より、廿四日水島より手紙届、九日十日鶴見へ手紙  
 出す、十一日大買家屯へ糧秣受取にゆく、十二日山走会山遊にゆく、温  
 家屯と云ふ所に馬廠隊居り不要馬の払さげあり、一ばん安直は一元五十  
 銭のあり、是は怪我をしてやせをとろへあるく事も出来ぬ馬、此近村の  
 農民此馬を買食物にする、十三日十四日鶴見より手紙届、是は過日伊藤  
 と云ふ者病氣ニて立帰るに付、我も其折此者に金三十円たのみし処、あ  
 とよりいだせし為換は届きしも、此金子いまだと、かずとの返事なり、  
 其時の伊藤淺草河部川町廿九番地伊藤忠次郎倅和吉に今だあはず、十五日そぼ唐  
 もろこし目出し、牛圈子出発、長林房中食、鉄匠爐に舎営、十七日同所  
 発、金州城までまへニて九里庄に舎営、此村ニて大和尚山辰巳の方に見ゆ  
 る、此九里庄より金州まで支那里程一里、十八日金州城北門これ永安門  
 外舎営、是より左にかき舛絵は近傍の百姓道具、其の外色々かきましよ  
 【挿絵38〜44】十九日金州永安門外三里村ニて諸々大そふじニゆく、廿日  
 同廿一日此頃黄瓜八〇赤大根畑根ぐらい、廿二日清歴四月廿八日ニ当る、  
 廿三日当時ハ人民立帰り、支那人日本人の呑食店もでき、中ニも甲やし  
 るこやなど多くあり、西洋料理屋もできソープ十二銭牛鶏一品二十五銭、  
 一通り金四十銭のもあり、蓋平滞在ノ頃ハ玉子一個二銭五り、当時一円  
 ニ付百三十個ニなれり、廿四日同所、廿五日三里村出発、金州より西へ  
 一里半程ざい石灰窰子ニ行舎営、爰は海岸也在方でもあり、いたつての  
 ん気な所ニて山も有り、此山にほろ穴日本の富士山ニある穴の中へはい  
 れば、乳の如く形ちをして天井よりぶらさがり水がぼたりくたれて居  
 る、奥の方へ行と色々なほとけ様のよふのだの龜だの岩へほり付てある、

途中にあかり取の穴がある、夫でもうすぐらくてきびがわるい、ふいに大きな声を見ると他の人驚、又此村は家が一けん二四けん二四けんとかかれて居る、井戸ハ二ツ其のかかりに一けんの内ニ四夫婦の外ニおじさんだのをいだの居る内があつた、野羊を沢山飼つてある内があつて、子供がひとり五六十びきひいて遊ばせ二ゆく、廿六廿七廿八廿九三十三十一日六月一日とみより手紙三通届く、二三四五六七日までねちやア食い食ちやアね、七日に左半紙列ハ出発、九日石灰簀子出発、金州より二十丁程有る所里加屯に一宿、十日金州城南門外にて閻家屯と云ふ村に宿、十一日とみより手紙届、我よりもいだし【挿絵44〜57】、此大連湾日本町に店を開き、あきなふ品ハたいがい同じ品、先ずをも成る物酒。紙。エンピツ。菓子類。たばこ。手拭。マッチ。足袋。手袋。砂糖。春画。するめまだ外にもあれどぎつとこんな物、其の内ニも酒を売らぬ内ハなく、あり合せの肴ニて時にハ鯛さはら刀の魚などあり、豆腐は始終あり、其の店也先キニてうたうもあり、【挿絵58〜63】十二日十三日ねたり食つたり、十四日身体検査、十五日のうわさは所持品をあらためると聞、各々余分な品ハ此宿りし家へやる人多くあり、中ニハよくばつた物ハ種々な品をもてり、我も書画とかすがい留の茶わんを持って居たれど、是ヲをいできた十六日午前六時したくして表へ制【整】列する、凱戦【旋】の声を聞いたからたまらない、ふところのあつたかい者ハ威勢よく歌なぞうたい、又無しはさもしひ顔して居る、そこへいつて我輩なぞハ少々内へ送てハあるし、又久しぶりでかゝアのかほが見られると思ふと嬉しくつてたまらない、此閻家屯を出立して大連湾ニゆく、咄しの通り検査の役人出てきて携帯品を見せると云ふから糸だてを地べたへしき、くるしがりの天途ぼしを見るよふに色々な物をならべた、其の中ニ欲張たやつハ沢山品物を持つて居てさんくしかられて品物は取上、此品を海岸へ山の如く積あげて火をかける、すると側ニ見て居たチャン公たまらづ名々品物をさらしてにげだす所を士官軍曹をいにかけて取もどし、チャンはど

やされてにげて行、出般【帆】時間【帆】に早ければ此間に日本町へひやかしに出かけた、此日本町と云ふのハ諸軍隊付の酒補【保】ニて、此商人が諸々より引上り、爰にかり小屋を立て種々な品をあきなふ、中ニも多きハ呑屋なり、持つてる者ハ呑んだり食つたりをこつたり、有つてもしハんぼふハかたパンなんぞ買つて、はなれた草原にひとりであぐらをかいてぱくついて居るものもある、一文なしのやつは銭を貸てくれといつて先の借のさいそくをされて居るやつもある、尤も其のはづ日本へ帰ればいつ会へるかわからぬ寄りあつまり者、はてハ喧嘩をする大きわざをやつていた、其の内にいよく正午十二時となつた、大隊長の命令ニて追々はしげ船にのり込本船中越【越中】丸に乗る、出般【帆】、十七日十八日九日舟中支那海朝鮮海にかゝりたれど山は少しも見へず海ばかり、其の内ニ右に一ツ大きな島を見る、廿日午後四時頃日本海に入る、馬関門司にハむかへの人多くいて、万歳をとなへ花火を打あげ所々に国旗をたて浜辺にでゝいる子供まで万歳くと祝す声、なんだか自分がひとりていさをしてかいつてきて皆んなにほめられたよふな気がして嬉しくつてたまらなかつた、廿一日午後広島の検査所似の島に着すぐ上陸、此島の島検査所【島】のあり様をかきまじよ、廿二日三四五六日まで同島帯在【挿絵64〜67】日清戦役日本軍死亡者は、有栖川宮殿下及北白川宮殿下始め、其の数実に一万五百四十七人の多きに達し、若し是に軍夫を加ふれば其数又数千人まさん、此死亡者を区別すれば、  
○戦死千二百五十五人○傷死二百九十一人○病死八千九百九十七人  
○死亡者百七人 ○生死不明二十七人  
○総計一万五百四十七人  
右之内死亡者多きは第二師団也、威海衛其の外遼東半島を準備して後ち台湾へ赴き、日数多き故なり、第五師団第三師【団】に戦死者多きは、遼東にて寒気烈しきに奮戦せる故なり、右に書きしは其の当時、二年間も毎日官報に出たるヲうつす

二十八年六月廿八日朝四時広島を汽車にて出発、同夕七時頃神戸に着、相生町旅人宿加藤小松方ニ宿る、廿九日八時神戸出発、三十日東京新橋に着、芝区桜田備前町自宅にかへる

(裏表紙内側)

丸木力蔵

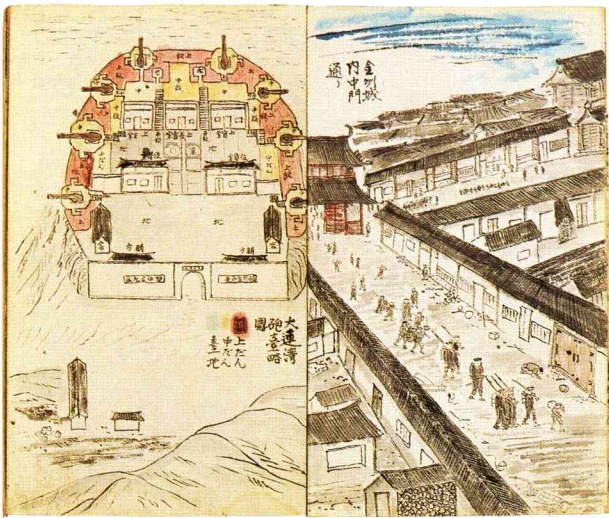
(国立歴史民俗博物館歴史研究部)

(二〇〇一年三月三〇日受理、二〇〇一年九月四日審査終了)









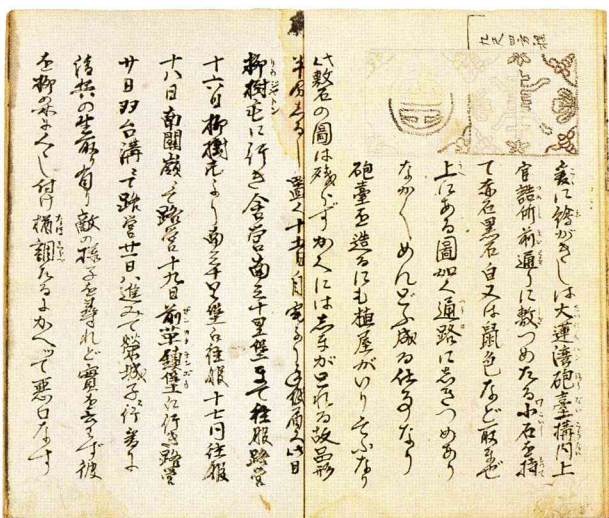
【挿絵17】



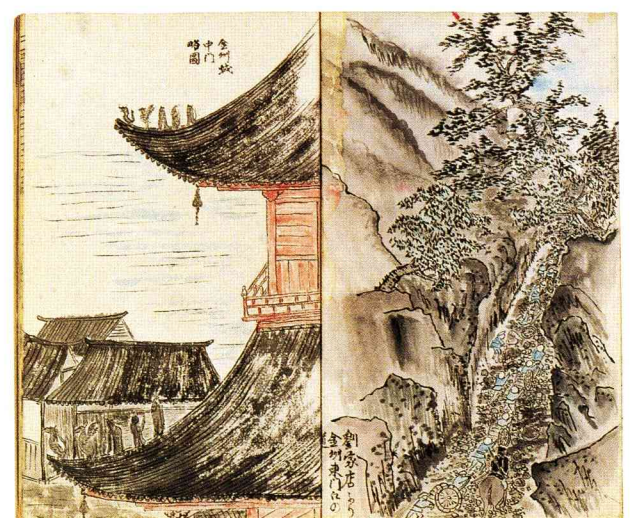
【挿絵11】



【挿絵10】



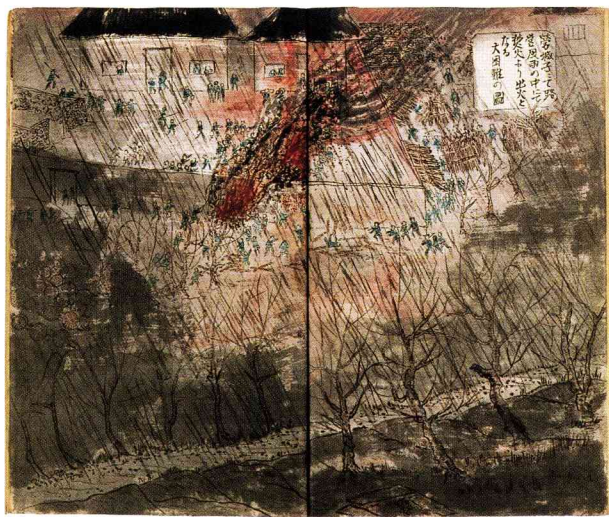
【挿絵18】



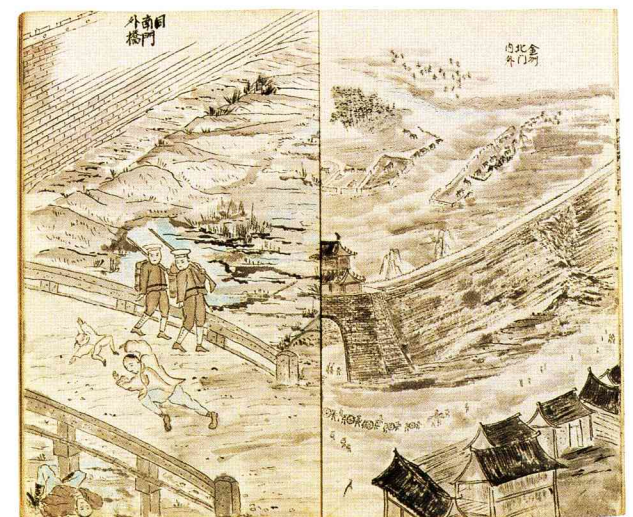
【挿絵13】



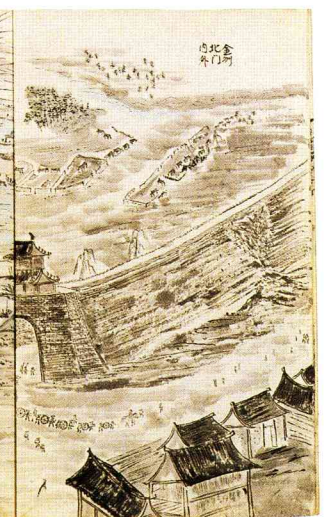
【挿絵12】



【挿絵19】



【挿絵15】



【挿絵14】

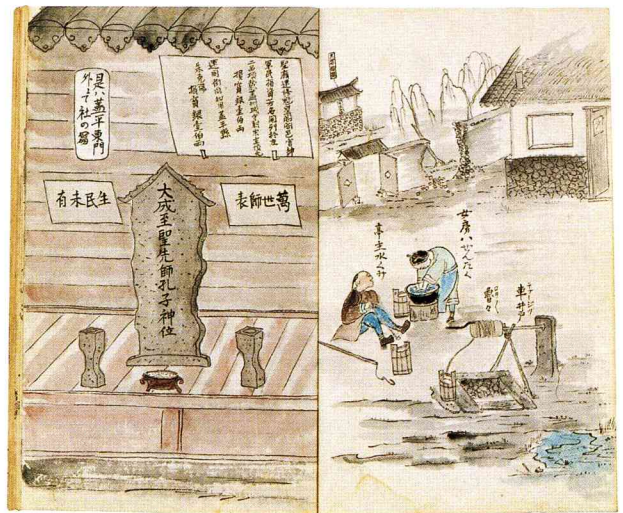








【挿絵34】



【挿絵30】

【挿絵29】



【挿絵35】



【挿絵32】

【挿絵31】



【挿絵37】



【挿絵36】

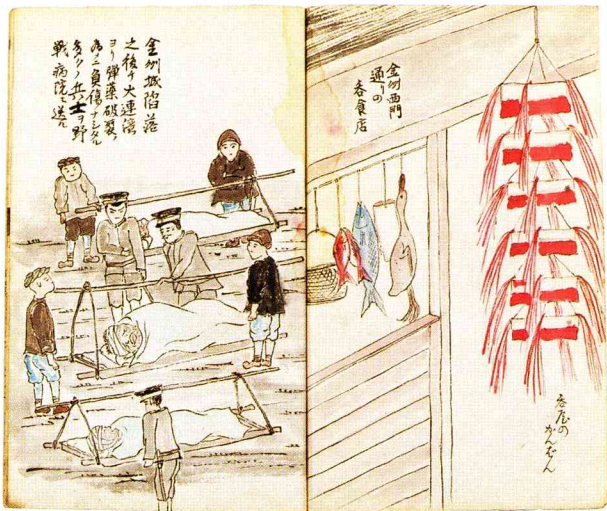


【挿絵33】

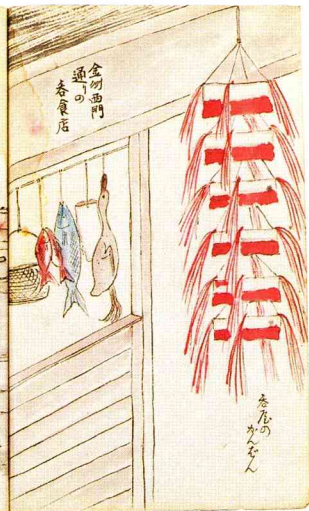




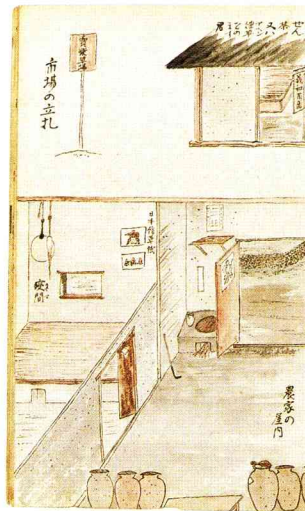




【挿絵54】



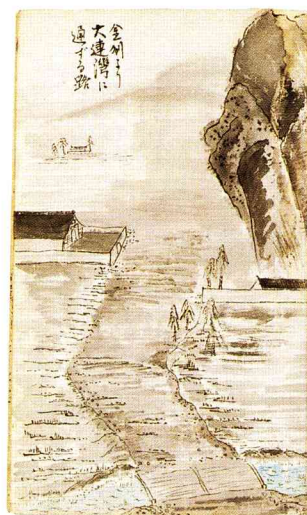
【挿絵53】



【挿絵48】



【挿絵47】



【挿絵56】



【挿絵55】



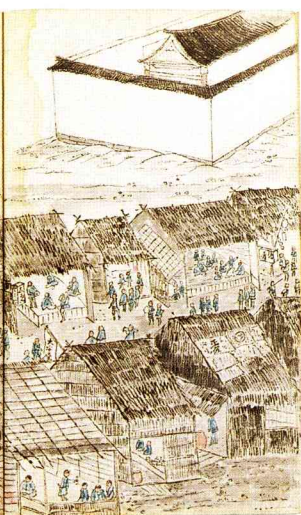
【挿絵50】



【挿絵49】



【挿絵57】



【挿絵52】

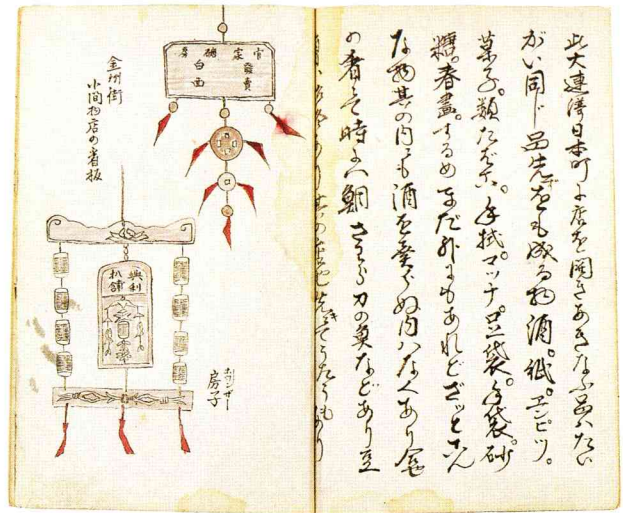


【挿絵51】

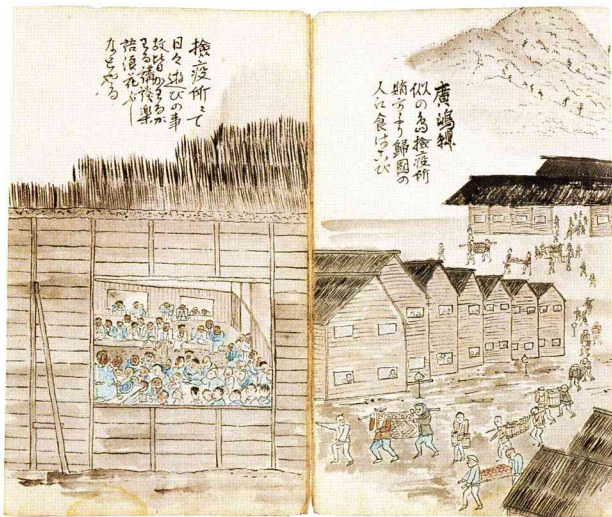




【挿絵63】



【挿絵58】



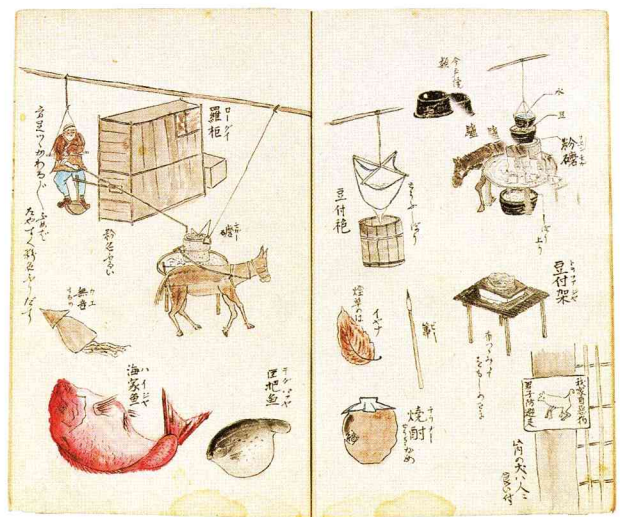
【挿絵65】



【挿絵59】



【挿絵67】



【挿絵61】

【挿絵62】

【挿絵60】

【挿絵64】

【挿絵66】